

安全で、一番安く、クリーン。これ、全部うそだ



インタビューに応じる小泉純一郎元首相
11月9日 東京都中央区、匿名撮影

小泉元首相、原発を語る

「政府は『世界で最も厳しい原子力規制委員会の基準に基づく審査をパスしたから安全だ』と言うが、(田中俊二)原子力規制委員長は『絶対安全とは申しあげない』と言っている。再稼働の責任はどこにあるのか曖昧な点が多い。米國などと比較して、避難計画やテロ対策で不十分な点はないのか。よく『世界一厳しい』なんて言えるなあ」

——小泉政権だって原発を推進していませんか。
「原発事故が起きるまでは専門家の話を信じていた。でもね、自分なりに勉強して分かったんだよ。政府

「かつて原発を推進してきた一人としての責任は感じていた。でも、うそだと分かってはやっぱりいいのかわからない。論議にも『過ちは改むるに憚ることなかれ』とあるじゃない。首相経験者として逃げるべきじゃない、やっつけいかなければと決意した」

——米國は平和利用を前提に核兵器の材料にもなるプルトニウムの活用を認めています。これによって「潜在的な核抑止力になる」との主張もあります。
「抑止力とか他國を牽制するような武器にはなり得ない。プルトニウムの保有

首相退任から丸9年。小泉純一郎元首相が退任後、初めて報道機関のインタビューに応じた。感じられたのは、「原発ゼロ」社会実現への強い思いだ。「政治が決断すれば必ずできる」。予定時間を大きく超え、約90分間にわたって小泉氏は語り続けた。▼1面参照

——川内原発1号機が再稼働しました。政府は福島原発事故を教訓に再稼働の審査基準を厳しくしましたが、それでも「原発ゼロ」ですか？
「再稼働は間違っている。全国で原発が1基も動かない状態は約2年続いたが、寒い冬も暑い夏も停電しなかった。原発ゼロでやっていけることを証明した。政府はできる限り原発ゼロに近づけていくべきなのに、維持しようとしている。それが自然エネルギーの拡大を阻害しているんだ」

「政府は『世界で最も厳しい原子力規制委員会の基準に基づく審査をパスしたから安全だ』と言うが、(田中俊二)原子力規制委員長は『絶対安全とは申しあげない』と言っている。再稼働の責任はどこにあるのか曖昧な点が多い。米國などと比較して、避難計画やテロ対策で不十分な点はないのか。よく『世界一厳しい』なんて言えるなあ」

——小泉政権だって原発を推進していませんか。
「原発事故が起きるまでは専門家の話を信じていた。でもね、自分なりに勉強して分かったんだよ。政府

かつて推進した責任感じる。でも、ほっかむりしていいのか

小泉元首相と原発

- 01年4月 首相就任「自民党をぶっ壊す」
- 05年8月 「郵政解散」で衆院選に大勝「国民に聞いてみたい」
- 06年9月 首相退任。在任期間(戦後)は史上3位
- 07年7月 新潟県中越沖地震、柏崎刈羽原発で火災
- 09年8月 政界引退
- 11年3月 東日本大震災、福島第一原発事故
- 13年8月 フィンランドの高レベル放射性廃棄物最終処分施設を視察「原発ゼロしかない」
- 14年2月 都知事選で細川護国元首相を支援するも落選
- 15年8月 川内原発1号機が再稼働「再稼働は間違っている」



は便益より損失が大きいと思う。そもそも核廃絶の時代なんだから、核兵器を持たなければならぬというのが分からない。米國だって核の問題を真剣に考えるようになってきている。廃炉プロセスは数十年かかるから、研究者の人材養成は引き続き大事だと思つた」

「米國は、日本が『原発ゼロで行く』と決めれば、必ず認めます。同盟國だからね。一部の推進論者は反対するかもしれないが、日本國首相と米國大統領が信頼関係のもとで話をすれば、米國は絶対に日本の意向を尊重する。それが民主主義國家同士の関係だ」

——世論調査で原発再稼働を問うと、今も反対が賛成を上回ります。ただ、それが選挙の投票行動につながるという状況もあります。

「『原発ゼロはまだ先の話だ』とか『他に大事な問題もある』と感じた人が多かったのかもしれない。自分の生活が原発と関係する人も少なくないでしょう。でも政府がどれだけ安全性を強調しても、いまだに高レベル放射性廃棄物の最終処分場は決まらない。国民は『今のままでは済まない時代がいつ来る』とわかっていますよ。原発ゼロが選挙の争点になる時は必ず来る。時代は変わります。その時、候補者自身がどう判断するかだろ」

——次男の小泉進次郎衆院議員と原発を話題にすることはありますか。
「私の講演は、インターネットなんかで聞いているようにだね。たまに食事する時などに話もするが、私からあしうろこうろとは言わない。自分で判断すればいいが、いずれにせよ原発の問題からは離れられない世代だ」

政界復帰はない 国民運動続ける

——来年は参院選の年です。新たな政治勢力を結集するために政界復帰するとは？
「もう引退したんだからまったくないよ、それはまったくないよ。でも、講演などを通じて国民運動はやっていきたい。原発をなくするという動きは根強いよ。決して一過性じゃない。聴衆の雰囲気から、それがひしひしと伝わってくる。こういう運動は全員反対でもやるといふ決意と意欲がないとできない。焦ることなく、あきらめずに続けていく、価値のある運動だ」

再稼働を「勝負時」と見たか

「記者に原発問題について話して勝手に書かれた」とはあるけど、こうやってインタビューを受けるのは、(首相を)辞めてから初めてだ。小泉元首相はインタビューの冒頭でこう切り出した。

私たちが2人は、かつて小泉首相審判者として政治記者生活のスタートを切った。今回のインタビューに

「記者に原発問題について話して勝手に書かれた」とはあるけど、こうやってインタビューを受けるのは、(首相を)辞めてから初めてだ。小泉元首相はインタビューの冒頭でこう切り出した。

私たちが2人は、かつて小泉首相審判者として政治記者生活のスタートを切った。今回のインタビューに

再選が決まった翌日、川内原発1号機が営業運転を再開する前日だった。首相時代、独特の政治センスで数多くの改革をしてきた小泉氏にとって、このタイミングは「勝負の時」に映ったのかも知れない。

原発推進だった首相時代からの路線転換については「都合が良すぎる」「勝手に理屈だ」などと批判がつきまとう。もちろん、小泉政権時代も電力会社は安全対策を怠ってきており、行

政トップとしての小泉氏の責任は免れないだろう。小泉氏自身、全国各地の講演で「責任は感じていて」と必ず反省を口にしている。普段、永田町取材している私たちが見れば、現職国会議員から「原発ゼロ」の機運は感じられない。そう伝えると、小泉氏は大きく首を振った。「国民が変われば、政治も変わる。自分一人でもやる」

(関根慎一、匿名撮影)